

〔Ⅱ〕生徒の創造性を生かした『徒手体操』の指導

飯島 幸久 北田 明子 原田 秀雄

I はじめに

創造性の開発ということが、いわれているが、体育の学習場面について考えてみると、直接的にあるいは狭義での「創造」ということが充分行われるのは、女子のダンス学習における創作活動ではないだろうか。もちろん学習のいろいろな場面で生徒がそれぞれの創造性を発揮し、学習に生かしていることも少なくないであろうが、その創造されたものが作品として、あるいはそれぞれの個人のものとして形になって残ることは少ない。そこで男子の生徒にも、創作ダンスに準じて、創作活動の過程を大切に徒手体操づくりをさせることは、創造性の開発につながる考えた。

また、体操領域の指導で、ともすると、我々教師は既成のラジオ体操や主運動に合わせた準備運動として教師側から運動を与える形で、生徒にとりくませがちである。その場合には、生徒たちの学習意欲は低く、あまり活発な活動は望まれない。文部省指導要領、体操のねらい(2)では、「自己の体力や生活に応じて体操を活用できる能力と態度を育てる」とあり、「自己の健康や体力及び目的などに応じて体操を構成し、それを活用していくことが重要である」と述べられている。体操の創作活動は、このねらいの実現に沿ったものとして位置づけることができ、体操への興味関心を高めさせ、より自発的、主体的に体操する態度を養うことができると考えた。

Ⅱ 今までの研究の概要

◎49年度 ラジオ体操第1の音楽に合わせて生徒ひとりひとりに徒手体操を創らせた

生徒の創作活動に対する反応を調べた
徒手体操を創るということについて

創作はむつまじい	28名 (66%)
創作は大切だ	7名 (16%)
創作は楽しい	4名 (10%)
創作は面倒だ	2名 (5%)
創作は時間がかかりすぎる	1名 (3%)

創作活動の過程について

学習過程	創っているうちに面白くなった	10名 (23%)
	創っているうちにいやになった	5名 (12%)
創作技術	同じようなものばかりできて変化をつけるのに苦労した	34名 (81%)
	図解して記録するのがむづかしかった	22名 (52%)
	リズムに合わせたものを作るのがむづかしかった	18名 (43%)
	<u>リズムが決められていたので作りにくかった</u>	15名 (36%)
学習態度	基本の体操をもっとやるとよかった	11名 (26%)
	<u>練習態度は余りよくなかった</u>	11名 (26%)
	<u>一部の人が不まじめであった</u>	7名 (17%)
	みんな一生懸命やった	3名 (7%)
	一部の人がだけ熱心であった	3名 (7%)

◎50年度 ラジオ体操第2の音楽に合わせて無作為編成のグループごとに徒手体操を創らせた

徒手体操の創作学習を終えてどんなことを感じたか

	中 3		高 1	
	人数	%	人数	%
一つの作品をグループのみんなでまとめあげたという満足感があった	23	80%	34	66%
作品を創りあげるためにグループのみんなが苦心したその過程がよかった	16		19	
自分か考えたものが作品の中に入られなくてうれしかった	22		35	
作品を創るということにグループ全体の気持が一つになった	11	20%	34	32%
一つの作品としてみた場合より作品かてきたという満足感かなかった	7		26	
<u>創ることに対して意欲かわず、努力する気持になれなかった</u>	8		15	
自分か考えたものが作品の中に入られなくて残念であった	1		1	
<u>グループの中に協力しない人、一生懸命やってくれない人がいた</u>	1		10	

Ⅲ 今年度の研究

1. 目的

過去の研究をふりかえってみると、まだまだ生徒の

創作活動に不十分な点が多く残されている(Ⅱ. 今までの研究の概要の項 線部分)、昨年度の授業後のアンケート結果にも「グループの話しあいに入っていない人がいた」「グループの中にリーダーがいなかった」「積極的に意見を出して欲しかった」などの意見が述べられている。これらの多くの原因は、グループ学習において、グループの成員相互の働きかけ、教えあい、助けあいが、不活発なために生じたものであると考えられる。これは、無作為編成のグループによる学習のマイナス面ではないだろうか。

また、ラジオ体操の曲に合わせて体操づくりをさせることは、既成の体操を意識して創造性の発揮を制限してしまう結果につながっているのではないだろうかと考えた。そこで、今年度は以下のような仮説をたて実証しようとした。

仮 説

生徒の仲間関係を重視したグループ編成で、生徒の選んだ曲に合わせた体操づくりを、単元教材として指導することは、体操の創作活動をより活発にして、生徒ひとりひとりの創造性を養うことができる。

2. 方法

- (1) 対象 高1男子66名(前半クラス・後半クラス)
- (2) 期日 昭和56年9月24日～11月30日(10時間完了)
- (3) 学習計画

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
オリエンテーション	曲の決定	体操(動き)づくり ○個人で ○グループで			体操(動き)のねりあげ・完成 ○グループで			作品発表会	
	創作活動								

(4) 学習目標

— 個人の目標 —

- ア. リズミカルな動きを高めよう
- イ. タイミングのよい動きを高めよう
- ウ. 素早い動きを高めよう
- エ. 力強い動きを高めよう

ア～エを考慮しながら曲に合わせたひとつの体操作品を創作しよう。

— グループの目標 —

作品発表会で最優秀(アンコール作品)になろう。

3. 授業展開

(1) オリエンテーション

前年度までの8mmビデオを見せ、創作意欲を喚起させた。グループ編成のためのソシオメトリー・アンケート調査をした。また、徒手体操をつくるうえでの

原則的なものについて、一応の理解をさせた。(下肢上肢、首、体側、背腹…) ノートに書く体操の図解の方法についても簡単にふれておいた。

(2) グループ編成

全員に、8mmビデオを見せた後、班長に推せんする人を1名、一緒に活動したい人を3名、一緒に活動したくない人を3名、挙げなさいということで氏名を書かせた。このアンケートからソシオマトリックスをつくり、仲間関係でのつまづきの少ないような班を、前半クラスで6班、後半クラスで6班の合計12班作成した。もちろん班長も推せんの多かった者を教師の方から指名をした。ひとつの班の人数は5～6名である。

(3) 曲の選択

白紙の状態、生徒に曲を決めさせると時間ばかりかけて、曲を決めるだけで2～3時間必要になってしまう恐れがあると考え、教師側から2・3曲示す方法をとった。前時に教師側から示した曲は「泳げタイヤキ君」と「ガッチャマン」であった。これは、過去51年度の生徒が創作を試みた時に用いたもので、8mmにその作品がとってあったことと、他の体操教材の曲(キーダイシュの音楽体操・木曾節・新体操の曲など)を事前にいろいろ調べてみたが、これはという曲が見つからなかったためである。ところが、第2時の前日に、前半クラスのO君が「ハイスクールララバイ」という曲のレコードを体育教室室にもって来て、『先生ぜひこの曲で体操をつくりたい』と申し出たのである。また、後半クラスのM君は、ロック系の曲が4曲程入ったカセットテープをもって来て『姉に相談したら、このテープの曲で創ると創りやすくおもしろいと言っていたから、一度聞いてみてください』と申し出た。このうちで、他の曲は、テンポが速くて無理だと思われたが、一曲「ヘッド・ゲームス」という曲が体操づくりに適しているようで採用することにし、第2時に、「泳げタイヤキ君」と「ハイスクールララバイ」と「ヘッド・ゲームス」の3曲を示し、自分たちの班は、どの曲で創るかを話しあわせた結果、前半クラスで「ハイスクール……」4つの班、「ヘッド……」2つの班後半クラスでは「ハイスクール……」3つの班、「ヘッド……」3つの班に別れ、残念?ながら「泳げタイヤキ君」はどこの班も希望しなかった。

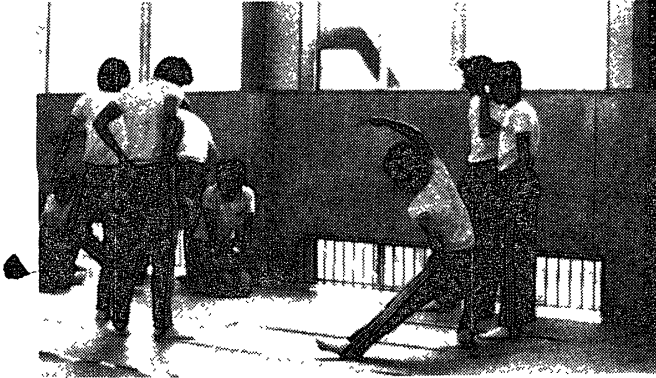
◎ハイスクールララバイ……………イモ欽トリオ
演奏時間3分32秒

◎ヘッド・ゲームス……………フォリナー(米)
演奏時間3分35秒

(4) 創作活動

生徒どうしの話しあいにより、数多くの体操を考案することを位置づけて、学習活動をさせるように留意した。その結果、必ず班員のひとりひとりが、一つ以

上の体操を考えてきて、時間内に発表しあい、修正しあい、自分達の作品の中にとり入れていくというのがほとんどの班の創作活動の学習ぶりとなった。（以下の授業風景参照）



ひとりの意見（創作した体操がどこの部位のものなのか、個人目標のどの目標を達成するものなのかなど）を、班員全体で修正していかせたことは、話しあいの内容を具体的にし、生徒どうしの創作活動を活発化するのに役だったと思う。また学習計画の第7時に中間発表会をもたせた。すでにほとんどできあがっている班と、まだまだ途中の班があったが、一様に緊張した発表がおこなわれ、他の班の生徒からの指摘が動機づけとなり、以後の学習に、より意欲的となりくみが見られるようになった。

(5) 発表会（評価活動）

学習計画第10時に、作品発表会をおこなった。発表の隊形は、下図のようにまとまりのある形をとらせ、発表演技はすべて、ビデオに収めた。



すべての発表後、「もう一度みたい作品」に手を挙げさせた。

どの班の発表も喜々としておこなわれ、発表を終えた生徒の顔には安んじ感が漂っていた。授業後のアンケートにも、発表会を終えた時の喜び（安んじ感）がもっとも多く表現されていた。

4. 結果と考察

(1) 単元教材としての扱い

ここでいう単元教材とは、10時間完了の学習のまとまりのことである。

指導計画のたて方には、

- ①体操を年間にわたって毎時間少しずつ帯状に配列して指導する方法
 - ②体操を学期ごとに何時間かのまとまりとして配列し指導する方法
- の2通りの立場がある。
- ①は継続的に体操を指導することによって、からだづくりを目指す場合に効果的であるし、②の場合は、ね

らいに応じた体操をつくりねりあげるといった学習への見通しがもたせやすい点で効果的と考えられる。今回のように創作活動を重要視した場合、②の方が望ましいといえる。また、指導要領の体操の内容を5つ（学習目標にあげた4つと、動きを持続する能力を高める運動）に考えると、これらを同時に指導できるという立場で、創作徒手体操を単元教材として扱う意義は深いと思う。

(2) グループ学習について

私は、毎日の授業で、グループ学習をいつも基本としている。そして生徒たちに仲間づくりを要求している。それは、技能の向上と表裏一体となって関連しあっていると考えているからである。つまり、より良いより高い仲間関係ができあがることは、生徒の学習効果を高め、より高い技能の修得につながる（また、この逆もある）という考え方である。

今回の授業では、目標を達成するためには、話しあい活動が多く必要とされる。このような時に無作為的に編成された仲間より、友好的な仲間の方がより学習活動が活発になると考えたわけである。事実生徒たちの学習ぶりは、先の授業展開のところでも書いたように望ましいものがみられた。授業に入る前には、恥ずかしいと言っていた生徒でも、仲間うちでの発表や会話は、教師の目からみても実に生き生きとしていたのである。

しかし、問題点がなかったわけではなく、友好的仲間関係のグループによる学習の弊害ともいえる、学習への不参加者（よそ事をやったりする者）への寛容の精神については、教師の指導にたよるところが大きかった。これは授業後のアンケート結果（下表）にもあらわれている。

〈仲間関係について〉

- ・よかった……………46名（72%） ※わるかったと答えた生徒の多くは『気がしれていたら
- ・ふつう……………11名（17%）
- ・わるかった………7名（11%） けた』と述べている

(3) 曲の選択について

授業後のアンケート結果（下表）に、それぞれの曲に対する、生徒の真剣な感想が述べられている。自分たちで苦労して創作をしたことからの、曲へ対する愛着と発展的意見をくみとることができるのではなからうか。

〈使用した曲について〉

	ハイスクールララバイ	ヘッド・ゲームス
	・テンポが速くリズムカルだった(32)	・テンポが遅くリズムにのりやすかった(18)

良かった点	<ul style="list-style-type: none"> みんなの知っている曲だった (5) 曲の長さ 	<ul style="list-style-type: none"> メロディー (3) 曲の長さ (2)
悪かった点	<ul style="list-style-type: none"> テンポが速すぎて遅い動きづくりにこまった (2) 曲の長さが長すぎた (6) ワンパターンになりやすかった (5) 	<ul style="list-style-type: none"> 曲の長さが長すぎた (9) テンポをつかむのにこまった (8) 曲に山がなかった(3) あまり知られていない曲だった
どんな曲を使ってみたいか	<ul style="list-style-type: none"> もう少し短い曲(2) マーチ風の曲 (2) YMO「たいそう」(2) 「ライディーン」(2) テンポが速い曲 もう一度この曲 もう少しテンポの遅い曲 「ヘッド・ゲームス」 「およげたいやき君」 「ロックンロール」 「長距離ランナー」 	<ul style="list-style-type: none"> 今回のような曲(3) もう少し短い曲 ポップス系の曲 もう少しテンポの遅い曲 グループごとに選んだ曲 みんなの知っている曲 「ソーラン節」 「ラジオ体操第二」 「スマイル・フォーミー」 「ライディーン」

また、2～3時の頃にみられた、テレビのものまね的動きをのり越え、楽しそうな作品づくりがなされていったことも、授業展開のところで書いたように、生徒が選んだ曲で、生徒がつくってみたいという意欲をもった曲を使用したことの学習効果と考えられるのではないだろうか。

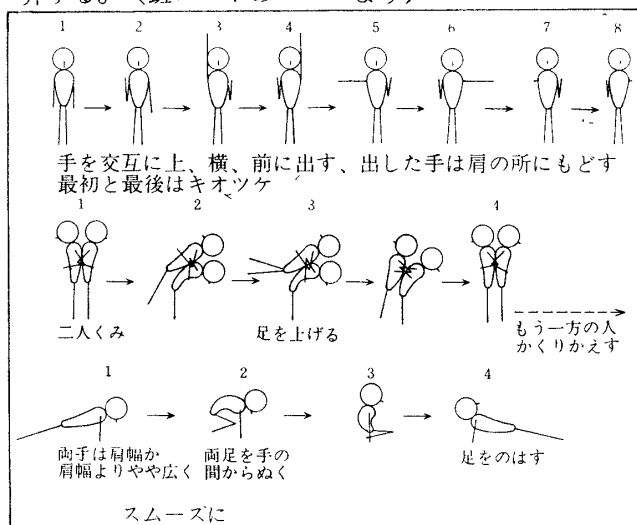
すでに述べたことであるが、授業の進度に影響すると考え、曲数を限定して曲を決めさせたわけであるがすべての班が違う曲を選んで（全く白紙の状態から曲を選ぶ）作品づくりをした方が効果的ではなかっただろうかということ、今後の課題として残されている。

(4) 創造性の開発について

こうした学習が、直ちに創造性の開発につながるか否かについては異論もあろう。しかし従来、女子の創作ダンスにしかなかった作品を創作するという学習活動を男子の学習場面にもちこんだという点で、生徒にとっても、教師にとっても新たな課題を意識する結果となり、創造性の開発の動機づけ程度には役だったものと考えている。

発表会でみられた体操に右上図のような既成のワクを越えた、生徒の創造力が発揮されたものがあるので紹

介する。（班ノートのコピーより）



また、発表会后、生徒に書かせた図解を資料として添付した。これらの中にみられるように、本来の徒手体操とは違った感じのものができあがった。生徒たちが、学習目標にむかって、創造力をいっぱいに出そうと毎時間努力していった結果をうかがうことができよう。

このような創作活動、ならびに発表会での作品発表の時の満足感が、“はじめに”で述べた、体操の生活化へつながっていくのではないかと信じている。

Ⅳ おわりに

昭和50年度、本校研究紀要保健体育科の発表の“むすび”の欄に「女子のダンス創作に対応して、男子の学習分野に創作活動を導入しようとした試みは決して失敗ではなかった。今後こうした分野がカリキュラムの中に取り入れられ、創ることの楽しさ、自己を作品の中に表現する喜びを生徒に与える機会を作ってやることは、われわれの責任であり、今後に残された課題であるともいえよう」と表現して以来、毎年、体操の創作活動は授業実践をしてきた。今年度のとりくみもねらいであげた、授業仮説を立証するに満足な研究結果ではなかったかもしれない。元来授業研究とは、そういうものではないだろうか。しかし、今回の報告を授業実践の一例としてみるならば価値をみいだすことはできよう。

御批判と御指導がいたたければ幸いである。

資料

